

道 標 みちしるべ

一 はじめに

前号は、「AI」時代と「幼児教育」の関わりについて考えてきた。今号は「AI時代」と「小・中学校教育」について考えてみたい。

二 今時の「子ども」と「AI時代」

(一)「今時の子どもの諸相」

私は、「道標」3(第三八三号)で、「今時の子どもの諸相」を1フツーちゃん、2フツーちゃん、3イモムシくん、4アニマルくんに分け、その特性を把握した上で、指導すること呼びかけた。

その後、サークルの仲間の「研究的実践」をふまえ、現在では、A群(フツーちゃん) B群(フツーちゃん、イモムシくん、アニマルくん)の二種で子ども達を認識している。

(二)「今時の子ども」の「特性」

「A群」の子は、不十分なながらも、言語で思考し、表現できる。つまり論理的思考も可能である。耐性もますますで、人と一緒に話合ったり共同で学習できる。

それに比し、「B群」の子は、

- 1 イメージ優先、見かけが大事
- 2 コトバは実感されなければ認識されにくい
- 3 論理的思考は十分にできない
- 4 耐性はきわめて乏しい
- 5 人との関わりが不得手

といった特性を持つ。

(三)「AI時代」に

「B群」は生き残れるか

では、「AI時代」に生き残れるのは「A群」か「B群」か。

答は、「B群」である。なぜか。

「AI」は、「道標」94号に記し

「人工知能(AI)」と「学校教育」との関わり(その5)▽98△

「人工知能(AI)」と「学校教育」との関わり(その5)▽98△

安藤 修平

た通り、「視覚・聴覚情報や文字情報を理解、凄まじい速度で山のような実例を精査しパターンを見出し、人間には理解しようもない洞察に至る。」論理的思考が軸。つまり「A群」の特質はすべて、いや遙かに何百倍も「A」が実行できる。

しかし、「B群」の「感情」や「イメージ優先」とする非論理的思考は、「A」にはどうすることもできない。

だから「B群」の子は、十分に

ない「論理的思考」の部分で「AI」の力を借りれば、十分に「人間」として生きていける、というのが私の考えである。

「A群」は、このままでは「AI」にやられてしまう。ではどうすればよいか。

三「AI時代」に必要な力

前号にも載せたが、「AI」と

「共存あるいは超えていくために必要な力」を再確認しておく。

「研究者」からの提案である。

指したこれからの教育の中心部分としなければならないと、私は思う。

四「AI時代」の「教科指導」

上の図を意識しつつ、「中学校」での想像の翼を拡げてみよう。私にとつての「知的冒険」である。

【国語科】

「論理的文章」の要点、要約、キーワード発見などは、「AI」の得意技だから、「体験」に基づく「疑問(自分の、自分だけの、自分が感じた)」を追究する「学習」が主流となるか。

「文学的文章」や「古典文学」や「詩歌」の鑑賞・創作も重要視されるであろう。「文学的文章」指導は、真の「意味」を読み取ることに中心が置かれるであろう。

「行間を読む」「意図」「主題」は何か、である。現在避けて通っている部分が重要になるが、「主題」は「客観的に一つ」ではなく、「読み手」の数だけあるという考え方に立たねばならない。

また、「乾いた日本語」と「潤いのある日本語」に分け、その両方が必要になるかも。前者は、外国人とのコミュニケーションのためのもので「正確性」を中心とし、文法が基底である。正確でなければ、「自動翻訳機」はERROR

とメッセージを出し翻訳してくれないからである。後者は、「日本語」をある程度「駆使」できる人(外国人も)のための「含蓄ある日本語」である。

【社会科】

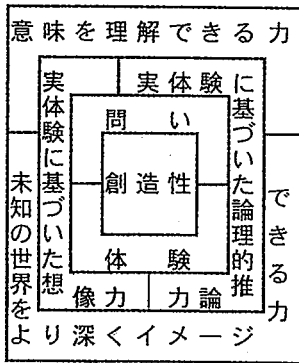
「地理的分野」では、VR(バーチャルリアリティ)が学習に持ち込まれる。世界各地の地理や産業現場を「疑似」体験できるから、その「疑似」体験から生み出された「問い」を基にしてその「問い」を深める「学習」が中心になる。

「歴史的分野」では、例えば「平家滅亡」を「AI」にアクセスすれば、その詳細が手に入る。だから単に「理解」する学習は、ほとんど意味を持たないであろう。

だから、「平家滅亡」に関わる「問い」を五十個生み出すとか、「滅亡」に注目し、AIで他の「滅亡」を拾い出し、そこから「問い」を生みだし、その「解答」への「アプローチの仕方」を「学ぶ」学習が、中心となるのか。

「公民的分野」では、「問い」を生み出す学習やその問いを解決していく方法に、インタビュアーや聞き取り、アンケートなどのよりフィールドワーク的方法が中心となるのか。

次号は「教科」の続きである。



左の「必要な力」は、現在の教育(私に言わせれば「A群」のみの教育)に於ける最も弱い部分である。つまり、「AI時代」を目

視点

北海道の学力・体力

問題を考える

一 現状をどのようにとらえるか？

2016年度全国学力・学習状況調査の結果を踏まえ、道教委は「北海道の子もたちは、基礎的な学習内容が身につけていない、テレビやゲームの時間が長い、一日の家庭学習の時間が少ない」といった課題がある」と発表した。基礎学力のみならず、基本的な生活習慣にも問題を抱えていることが明らかになった。2007年の調査開始以来低迷が続いたため、道教委は「2014年度までに全国平均以上にする」という目標を立てた。しかし未だ目標には達していない。さらに2016年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果を見ると、北海道の子もたちは、全国平均に比べ低い状況にあることもわかった。学力・学習状況調査の結果が良い県は、生活習慣も良好であり、体力・運動能力、運動習慣等調査の結果もよい。「学力」と「生活習慣」と「体力」とには密接な関係があるようだ。道教委も、本道の子もたち一人ひとりに、社会で自立して生き

ていく上で必要な学力や体力、望ましい生活習慣や規範意識を確実に身につけさせることができるよう、学校、保護者、地域住民及び行政が、課題や危機意識を共有し、学力向上に向けた取組を一層進めることができるよう、北海道「学力・体力向上運動」を進めている。全道の多くの地域や小・中学校での懸命な取組の結果、改善の傾向が見られている。大きな成果を上げている地域もある。しかし、すべての教科において、また体力合計において、全国平均に届いていないという厳しい状況を受け止めて、改善を図っていかなければならない。

二 様々な事情を踏まえて
▼スマホやゲーム、TVに1日あたり3時間以上費やす子どもの割合が小中いずれも約4割と、全国平均より高いことがわかった(2016年度調査)。これでは学力も生活習慣も体力も向上していかない。子どもたちは確かな学びによる成長から見放されてはいないか。▼「学校は友達作りの場、勉

強は塾や家庭教師に、運動はスポーツ教室に」との保護者の言葉を聞いたことがある。学力・体力について「学校に任せているわけにはいかない」と保護者から突き放されてはいないか。▼逆に「勉強ができるようになって村を出て行かまう」と考える保護者もいる。過疎に悩む農村や漁村にこのような考えをもつ保護者は多い。目指す学力が地域を過疎化させる要因と見なされてはいないか。▼35人学級等の定数改善策が秋田や福井などに比べて進んでいないか。学力・体力向上策が教員の頑張りだけに託されてはいないか。▼「テストの点数を上げることとどれだけの意味があるのか」と学力向上運動に背を向ける教職員もいる。子どもたちが頼りにする教員から見放されてはいないか。▼小規模校が多く、複式授業が行われ、中学校では該当教科の免許を有する教員が配置されていない場合もある。

このような様々な事情を乗り越える手立てはないだろうか？
三 「知・徳・体」の向上はすべての学校の目標
全道のほとんどすべての学校の教育目標は「知・徳・体」でくくることができている。「知・徳・体」の目標に向かって、それぞれの学校は教育活動を展開している。そ

れぞれの学校は教育目標への取り組み成果を発表して運営状況を明らかにする必要がある。数字で見えない部分も多いけれど、学力・体力・生活習慣の一定の部分は測ることができている。測定した結果に基づいて教育計画を練り直していかなければならない。

学力・体力の向上ならびに徳育の推進は、すべての学校の目標である。測定できる部分も測定できない部分も、向上させるために進んでいくのが教育関係者の責務である。学校の教育目標に向かって具体的な手立てをもつて教職員が力を合わせて進んでいくことができれば「知・徳・体」はわずかずつでも向上していくはずだ。それができないとすれば職業人としての責任を全うすることができないことになる。

という声も聞こえてくる。学力は全人格の向上があってこそ、人生を切り拓く力となり得る。だからこそ、質の高い授業、わかる喜び、できる喜び、子どもの生活習慣の改善、読書活動や運動の充実など、すべてを循環させることが求められる。この好循環は、知識力・思考力・判断力、そしてそれらを支える体力や意志力を養っていく。そうすれば、測定できる学力も測定できない学力も向上していくはずだ。

この好循環こそが、子どもの自立のための学力・生活習慣・体力向上策である。
五 未来はオール北海道で
北海道の子もたちの健やかな成長を願って、学力・生活習慣・体力問題に取り組みでいきたい。秋田は50年かけたと言われる。北海道は取り組み始めて10年である。定数改善が足踏みしている苦しい現状もある。子どもへの貧困問題も顕在化してきた。そんな状況だからこそ、わかる喜び、できる喜びを求めて、学校・家庭・地域、教育行政・関係機関等、全ての関係者が今一歩、歩み寄ることが強く求められる。学力・生活習慣・体力の向上が、子どもの未来を拓いていく。地域の未来を拓いていく。北海道の未来は、オール北海道で切り拓いていきたい。



新しい外国語教育への取組に向けて

札幌小学校英語活動研究会

会 長 綱 淵 友 也

一 はじめに

平成29年3月31日に、新しい学習指導要領が告示されました。その総則に、育成すべき資質・能力の三つの柱となる「知識及び技能が習得されるようにすること」「思考力、判断力、表現力等を育成すること」「学びに向かう力、人間性を涵養すること」を偏りなく実現できるようにするものとするとあります。そして、教科横断的な視点、教育課程の評価、教育課程実施の体制確保と改善を通して教育活動の質の向上を図っていくカリキュラム・マネジメントに努めることが求められます。更には、10分から15分程度の「短時間学習」について、条件が整備されているときは、その時間を年間授業時数に含めることができるとあります。そして、中・高等学校学習指導要領を踏まえ、円滑な接続が図られるよう工夫することもあげられています。

以下、これら総則に示されていることを外国語教育の窓から考察してみることになります。

二 三つの柱から
勿論、外国語教育においても、この三つの柱に沿って教育課程を編成しなければなりません。各教科等での捉えや学習内容とどう結び付いているのかを明確にもたなければなりません。

(以下目標を要約)
「知識及び技能の習得」
日本語と外国語の違いに気付き、音声や基本的な表現、読むこと、書くことに慣れ親しみ、実際のコミュニケーションにおいて活用できる基本的な技能を身に付ける。

「思考力・判断力・表現力等」
身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりする。表現を推測したり、語順を意識しながら書いたりして、考えや気持ちなどを伝え合う。

「学びに向かう力、人間性」
外国の文化を理解し相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図る。これらを目標として学習を進めていくときに、やはり大切なのは、「問題解決的学習」であり、児童

二 三つの柱から

三 短時間学習とカリキュラム・マネジメント

四 小中連携

ととつての「伝える必要感や伝わった達成感」であることは間違いありません。友達や外国の方等との関わりを意識させ、使える外国語を目指していくこととなります。

「短時間学習」は、当然3・4年生ではなく、5・6年生で設定することが予想されます。ここで注意したいのが、総則にある「単元や題材などの内容や時間のまとまりを見通した中で、その指導内容の決定や指導の成果の把握と活用等を責任をもって行う体制が整備されているときは、その時間を当該教科等の年間授業時数に含めることができる」ことです。単に「短時間学習」ではなく、メインとなる「コマ分の学習内容との連続性が問われるでしょう。例えば、月曜日に「コマを設定した」としたら、火曜日に行う「短時間学習」は、その続きや振り返り、発展、習得となるべき時間として考えるべきです。45分と15分を連続して60分授業も選択肢ですが、どちらにしても、連続した学習内容でなければならぬということ。まさにこれが、外国語でのカリキュラム・マネジメントの一つであり、質の向上をねらうてのものでない

ればなりません。また、外国語でも教科横断的な視点が求められていますので、様々な教科等との関連を十分に意識し、児童の視点を大切にした小学校教員ならではの創意工夫が重要になります。

め、外国語研修だけを大幅に増やす訳にもいきません。すでに始まっている研修も多いのですが、文部科学省はもとより、教員養成系大学での英語力アップの取組また、卒業した後の研修機会の増を望みます。ただし、教員の日常の勤務に無理が出ないような時期や内容を考えていただかなければならないことになるでしょう。更に言えば、これも既にありますが、教員免許状更新時の単位認定講習の中でも行っていたらいいと思っ

五 教員の研修
校内で外国語に直接関わるのは、これまで5・6年生という全体の1/3の教員数でしたが、新学習指導要領からは3年生以上になるため、2/3と数の上では逆転します。同時に、専科指導教員の配置も考えなければなりません。小学校の教員誰もができる外国語の指導方法の工夫と、教員の英語力の向上が求められます。今後、より社会や保護者から期待されることは大きくなります。

六 おわりに
来年度から移行期間に入りますが、今から準備していかなければならない課題が山積しています。まずは、教員の新学習指導要領についての学習は必須です。文部科学省では、新教材を12月に示す準備をしていますので、それを待つてからの動きが大きいのですが、今のうちに行えることはたくさんあります。学校経営上、校長としてのリーダーシップを発揮すべき大切な年度であります。

最後になりましたが、本年12月に、「全国小学校英語活動実践研究大会」札幌大会が開催されます。各校の力になるべく準備しておきますので、是非ご参加ください。

(札幌市立澄川南小学校長)

教育実践

「コミュニティ・スクール」と「小中一貫教育」 地域と共にある学校づくり

北広島市立西部中学校

校長 新田 元 紀

一 はじめに

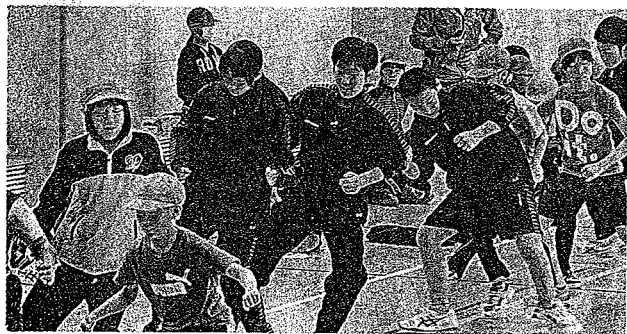
本校は、学級数一〇(うち特支学級四)、生徒数二〇九名。地域は開拓一三〇年の歴史があり、中山久蔵氏による寒地稲作発祥の地であり、クラーク博士が「Boys be ambitious」の言葉を残した地でもある。

校区の小学校は一校で、平成二五年度から小中一貫型の西部地区コミュニティ・スクール(CS)事業を進めている。地域住民は「地域で子ども達を育てる」という意識が強く、学校への協力体制が充実している。

生徒は明るく生き生きと生活を送っているが、同じ地域、メンバーで育ってきたこともあり、生徒同士での切磋琢磨の欠如や自己有用感に欠ける面も見られた。

二 小中一貫とCSの取組

「地域で『子ども』を育てる」という場合にイメージされる子どもは、おそらく「保幼小中」であろう。また、「地域」で学校を支える」という場合の地域の範囲は



小中一貫の取組～小中合同体力テスト

「中学校区」が最小単位にして、適切な範囲ではないだろうか。西部CSでは設立当初から、学校運営協議会の委員を小中で一致させて会議や活動を進めてきた。子ども像を地域や保護者と共有するという観点、地域人材や教育資源活用という観点からも、CSは必然的に小中一貫型になっていくのではないかと考えている。

三 西部CSの目指す子ども像と目標

西部CSでは、九年度で育てたい子ども像を「心豊かに大志をいだき、たくましく生きる子ども」とした。また、「子どもの夢や未来をみんなで支えよう」西部の伝統を生かして子ども達の「チャレンジする心」を育む、「豊かな人間性」「地域を愛する心」「心身の健康」の育成をめざしている。

を月に一度行っている。地域貢献としては、「除雪ボランティア」、「生徒が栽培したカボチャの施設への寄贈」、「合唱部の施設訪問」等がある。また、小六と中三が「CS防災訓練(主に搬送訓練)」を行った。災害時に自分たちで地域のことを考え、「自助」「共助」の意識を育てるための取組であり、学校のリーダーを地域のリーダーへと育てる取組でもある。「防災」は、CSの一つの鍵と考えており、HUG(避難所運営ゲーム)などにも発展させていく予定である。

自分たちで企画から運営に携わる事業を行っている。生徒の有志が「バスケット大会」と「お菓子作り教室」を行ったが、小学生も参加し、中学生のリーダー性を育てる意味でも有意義であった。CS事業ではないが、小五と中二の合同体力テストを行った。小学生にとっては、体育専門教師に指導を受けるチャンスであり、先輩方に面倒を見てもらえる時間となる。中学生も可愛い後輩達に良いところを見せようと頑張り、好結果を生む取組となった。地域人材の活用などでCSが関わる可能性もあるだろう。

① 確かな学力を育む取組

義務教育九年度で「めざす子ども像」を明確にし、九年度を見通した教育課程を作成した。また、小中が一緒に取り組む学習と生活の西部スタンダードを確立した。CSの学校支援として授業補助や補充学習補助を行っており、「漢字検定」や「英語検定」もCSの取組の一つである。検定は小学生も一緒にを行い、親子で挑戦する家庭も多い。保護者や住民の試験監督等のサポートも受けている。

また、小学生から続けて「読み聞かせ」の読書支援もあり、情操教育にも一役買っている。

② 豊かな人間性を育む取組・地域を愛する心を育む取組

地域や保護者、学校が通学路での声かけを行う「地域あいさつ運

③ 心身の健康を育む取組
地域では「ソフトボール大会」や「スナックゴルフ体験」、「冬まつり」等の健康を育む行事があるが、中学生の参加も多い。平成二七年度からは、生徒達が



CS防災訓練～負傷者搬送

また、小六と中三が「CS防災訓練(主に搬送訓練)」を行った。災害時に自分たちで地域のことを考え、「自助」「共助」の意識を育てるための取組であり、学校のリーダーを地域のリーダーへと育てる取組でもある。「防災」は、CSの一つの鍵と考えており、HUG(避難所運営ゲーム)などにも発展させていく予定である。

家庭・地域・学校が「目標を共有しよう」「辛口の友人になろう」「人と人をつなごう」という姿勢で、西部CSを進めてきた。生徒は多様な経験をすることで、地域とのつながりを意識し、自己有用感を持つようになってきた。教職員も効果を実感し、地域行事への参加や地域資源の発掘、有効活用を意識する取組がなされてきている。学校と地域がウィン・ウィンの関係を築くことが大切だが、保護者・地域のCS参画意識も高まり、地域の活性化も図られつつあるように感じている。課題もあるが、さらに充実、発展させていきたい。

大樹町教育大綱

(平成27年度～平成30年度)



【目 標】

「人が輝く」～夢を育み学びの意欲を高めるまちづくり～

住民一人ひとりが日常のなかで、豊かな心と郷土愛を育み、夢と生きがいのもてる地域社会をつくります。

学校教育や文化・スポーツ活動、交流を通じて、自らの意思で自己の充実や生活の向上のために、生涯にわたって学習し、課題に取り組み、学んだ成果を地域で生かせる環境づくりを推進していきます

【基本方針】

柱1 《生涯にわたり育てる》

(1) 学校教育

子どもたちに身に付けさせるべき資質・能力として、確かな学力、豊かな心、健やかな体をバランスよく育む教育を推進します。

(2) 地域全体で育てる体制づくり

学校・家庭・地域が協働して、地域全体で子どもたちを守り育てる体制づくりを推進します。

柱2 《生涯にわたり学ぶ》

(1) 生涯にわたる学習活動への支援

生涯学習センターや図書館など、社会教育施設の機能充実や利便性の向上に努めます。生涯にわたる学習活動の必要性を普及・啓発するとともに、ライフステージに応じた学習機会の充実に努め、自らの意思で自己の充実や生活の向上のために、生涯にわたって学習し、学んだ成果を地域で生かせる環境づくりを推進します。

(2) スポーツ活動の推進

社会体育施設の計画的な改修整備を行い拠点を確保していくとともに、それぞれの年齢や体力に応じてスポーツに親しめる場の充実に努め、町民の日常的なスポーツ活動を推進します。

(3) 芸術・文化活動の推進

生涯学習センターを拠点に、町民の自主的な参加、運営を促しながら、地域文化を育みます。また、文化的遺産への関心や保護意識を高めながら、文化財、郷土資料の有効活用や郷土芸能、伝承技術の継承を推進します。